

■ はじめに

動物病院において、日常診療で最も多くみられる疾患は歯周病と思われます。

“3歳齢以上の犬猫の約80%は歯周病”といわれて久しいですが、最近では“1歳齢未満の小型犬の90%は、すでに歯周病により歯を支えている顎の骨の吸収を認めている”と報告されています。

毎日、何らかの病気で来院される犬猫の口の中をのぞいてみてください。

歯の表面が薄く黄色～茶色になって、歯に接する歯肉の縁がすでに赤くなっている場合はすでに歯周病です。

歯周病の原因は、歯垢中の細菌です。

したがって歯周病は感染症になりますが、通常のワクチンのなかに含まれるさまざまな疾患と同じように、予防できる病気です。

しかし、なかなか適切に予防されている飼い主さんは多くありません。

歯周病の予防は、デンタルホームケアを行うことです。

本稿では、愛玩動物看護師の皆様が口腔歯科疾患、特に歯周病における知識と歯周病を引き起こさないための方法を解説します。

※実際の内容と異なる場合があります

■ 口の病気における行動・しぐさ

日ごろ動物病院では、さまざまな疾患を主訴に、多くの来院があります。

飼い主様は、その行動やしぐさが、実は口腔疾患によるものであったということを動物病院で初めて気づかれることがあります。

動物病院に来院した動物の口腔疾患を診察する際に、この症状は口腔内に起因したものであろうという症状や行動があります。

しかし、行動やしぐさあるいは症状から、この個体は口腔内の病気であろうと大まかに診断できても、口腔疾患のなかの“何々の病気である”という疾患名まで判断することは困難です。

口腔疾患に罹患した犬猫の行動やしぐさについて解説します。

執筆者



Fujita Keiichi

藤田 桂一

獣医師

フジタ動物病院 院長
日本小動物歯科研究会 会長
財団法人 動物臨床医学研究所 理事

■ 経歴

2008年～2012年：岩手大学 農学部獣医学科 非常勤講師
2012年～2024年：帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科 非常勤講師
2013年～現在：日本大学 生物資源科学部 獣医学科 高度臨床獣医学 非常勤講師

